



月刊

2012

7
月号

みんぱく

特集

世界をさわる

手法を求めて

ユニバーサル・
ミュージアムの
可能性

対談 | 小山修三 × 広瀬浩二郎

コラム | 五月女賢司 鈴木康二 大高幸 真下弥生



子供時代、NHK大河ドラマは、歴史好きの私の毎週の楽しみでもあった。「天と地と」では、石坂浩二演じる上杉謙信のイケメン（という単語は当時は無かったが……）ぶりにトキメキ、「縦ノ木は残った」の原田甲斐の重厚な存在感に感嘆し、「新・平家物語」の終幕、「みんな死んで、おれとお前か……」という緒形拳のしみじみとした台詞は、世の無常を幼な心に刻みつけたものであった。

しかし、近年の日本のテレビドラマは、韓流ドラマ人気におされてか、勢いが衰えているようだ。長らく韓国ドラマには無関心だったのだが、時代劇『イ・サン』にはまってその魅力に目覚めた。懸命に王に仕える重臣役のハン・サンジンが、私のお気に入り（難局にあたって悩む表情がステキ！）だが、役者の演技力と物語の起伏が、かつての日本の大河ドラマのレベルにあることが、韓流ドラマ人気の要因であろう。日本の昨今のテレビドラマは、実力よりも知名度に依存したキャスティングが目につき、脚本を消化しきれない役者たちの薄い演技（とさえ言えないもの）に白けてしまう。いや、そもそも脚本からして薄っぺらいのかもしれないが。

かたや、韓国ドラマガイドに掲載されている役者インタビューは、プライベートを披露する日本のインタ

プロフィール

同志社大学大学院社会学研究科教授。専門はメディア学、比較文化。映像や文学にみられる男性と女性の表現、そこから社会的背景を読み解くことを研究テーマとして活躍。著書に「遊女の文化史——ハレの女たち」（中央公論社、1987年）、「色」と「愛」の比較文化史」（岩波書店、1998年。サントリー学芸賞、山崎賞）「女装と男装」の文化史」（講談社、2009年）などがある。



大河ドラマと日本社会

佐伯 順子

ビューと違い、役柄や物語の解釈、演技論が主体で、韓国の役者がいかに役づくりに真摯に取り組んでいるかが伝わる。この種の掘り下げたインタビューに、現今の日本のタレント役者たちは果たして応じることができらるだろうか。

今年の大河ドラマ『平清盛』の視聴率の苦戦が伝えられるが、同じ日曜の夜に視ると、『イ・サン』との差は歴然。とりわけ女性登場人物の無力さと辛気臭さに絶望する。歴史的に仕方ないとはいえ、うつむきがちで無表情で、男たちの欲望の道具でしかない女たちの姿は、停滞感漂うこのご時世、あまり見たいものではない。一方、時代がより新しいとはいえ、韓国時代劇の女たちの、王（＝男）をも圧倒する自己主張と主体性には、大いに勇気つけられる。

時代劇といえども、ドラマは同時代を映す鏡。韓国社会の勢いと、日本社会の閉塞感との落差が、ドラマにも自ずとにじみ出るのは。

過去五一作の大河ドラマの歴史のなかで、女性単独主人公は八作、夫婦ものは二作。来年は九作目の女性主人公。しかも我が同志社ゆかりの新島八重。日本の復活と女性の活力を象徴するドラマとなり得るのか——今後の日本社会の鏡として注目される。

月刊
みんぱく
7月号目次

- | | |
|--|--|
| <p>1 エッセイ 千字文
大河ドラマと日本社会 佐伯 順子</p> <p>2 特集 世界をさわる手法を求めて
ユニバーサル・ミュージアムの可能性
対談 小山 修三 広瀬 浩二郎</p> <p>4 さわる展示のあり方を求めて
——吹田市立博物館のこころみ 五月女 賢司</p> <p>5 「時間」の壁を超えられるか!?
——レプリカの可能性 鈴木 康二</p> <p>7 エドゥケーターの役割
——メトロポリタン美術館の事例から 大高 幸</p> <p>8 ベン・シャーンをさわる、見る、聴く
——平面作品への重層的なアプローチ 真下 弥生</p> <p>10 研究フォーラム
みんぱく公開講演会
ヨーロッパと日本の宗教——問いなおされる救済のかたち
藤本 透子</p> <p>12 みんぱく Information</p> | <p>14 地球ミュージアム紀行
国民国家の境界を書きかえる試み
フランス・国立移民史博物館（シテ）
田邊 佳美</p> <p>16 連載リレー 知の収蔵庫
住をめぐる旅 その1
家作りは本能か?
佐藤 浩司</p> <p>18 多文化をあきなう
貧困から抜け出す力——民主的な人と文化の育成
野田 沙良</p> <p>20 異聞逸聞
ドングリだけでは育たないイペリコ豚
野林 厚志</p> <p>21 みんぱく私の逸品
ナーガスワラム
寺田 吉孝</p> <p>22 フィールドで考える
住居をよむ
——中国新疆ウイグル族の暮らしの場
熊谷 瑞恵</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|--|--|

世界をさわる

特集

手法を求めて

ユニバーサル・ミュージアムの可能性

一対談 小山修三×広瀬浩二郎

視覚からの情報に頼りがちなミュージアムの展示。そこに触覚の要素を取り込んだら、どのようなことが起こるのか。

視覚だけでは「みる」ことができないあらたな感動に出会おうだろう。それは、自らのうちに眠っていた学び、楽しみ、愕く「心」の再発見でもある。

「さわる展示」には、視覚に縛られた感覚を解放し、新しいミュージアムを創造する力が秘められている。

本特集では、「さわる」をキーワードとして、誰もが楽しめる博物館のあり方を模索する小山修三名誉教授と広瀬浩二郎准教授が、「さわる展示」の実践事例を紹介し、その可能性をさぐる。



小山 修三
前吹田市立博物館館長
国立民族学博物館名誉教授



広瀬 浩二郎
民博 民族文化研究部

「さわって」読み取るまん丸(ま)粘土のメッセージ展」で展示されたインスタレーション。2011年11月滋賀県立陶芸の森(提供:滋賀県立陶芸の森)



ワークショップ「点字でモテモテ——さわって、つくって、つたえる点のアート」で参加者が制作した「点字アート」。2012年3月民博



「さわる展示」を楽しむ来館者。2011年9月すいはく(撮影・五月女賢司)



2005年に開催した「ふしぎの探検——足とはきもの」展より、田下駄をはいて、田んぼに足を踏み入れる体験型のワークショップ。すいはくで継続的に体験型の催しをおこなうきっかけにもなった。2005年すいはく(撮影・藤田京子)

時間をかけて丁寧にさわる

小山 民博のインフォメーション・ゾーンに「世界をさわる——感じて広がる」コーナーができましたね。広瀬さんもプロジェクトメンバーでしたが、新しい思想を具体化するのにはたいへんだったでしょう。

広瀬 コンセプトの決定、資料の選定にも苦労しました。かつてあった「もののひろば」コーナーは、展示資料をセンサーにかざすと音声で解説が流れる仕組みでしたが、コンピュータ・システムが古くなって廃止されました。今回は「ゆっくり時間をかけて、優しく丁寧にさわる」ことで来館者の想像力・創造力を刺激したいと考えました。

小山 どんなモノを展示していますか。
広瀬 代替可能な資料が中心ですが、トキのバードカービング、イヌイットの滑石彫刻など、貴重な資料も展示しています。将来的には「さわらなければわからないこと」を楽しく引き出せる資料を増やし、コーナーを充実させていきたいですね。

博物館のタブーに挑む

広瀬 「世界をさわる」を実現するにあたっては、二〇〇九年に小山先生と僕が中心になって立ち上げた科学研究費プロジェクト「誰もが楽しめる博物館を創造する実践的研究」、通称ユニバーサル・ミュージアム研究会の議論の蓄積が役立ちました。

小山先生とのお付き合いは、先生が民博

を退職された後に、より深くまりましたね。

小山 民博を退職した後、二〇〇四年に吹田市立博物館(以下、すいはく)の館長に就任しました。第一印象は「なぜこんなに人が来ないのか」。展示場の陳列品はすべてガラスケースに入っている。これは日本の他の博物館でも同じような状況ですがね。それでは視覚障害者はどうすればいいのか。博物館の発想を根本的に変える必要があると感じました。そのキーワードは「さわる」であると考え、広瀬さんに相談したわけです。

広瀬 二〇〇二年から一年間、米国のプリンストン大学に客員研究員として滞在したとき、スミノニアン博物館群を二泊三日で調査旅行したことが印象深い思い出です。博物館スタッフ、ボランティアのサポートを得ながら、僕のような全盲者が単独で博物館巡りができることに、素直に感動しました。その経験も活かして、二〇〇六年に民博で企画展「さわる文字、さわる世界」を開催しました。

「さわる」をキーワードとして博物館を市民に開かれた場にしようとする小山先生と、視覚障害者の立場から誰もが楽しめる博物館をめざす僕の目標が一致したのでね。僕が民博に着任した当時、小山先生は雲の上の存在で、こんな野蛮な、もとい、偉大な先輩とはご縁がないだろうなと思っていましたが、どういわけか深くお付き合いすることになって(笑)。

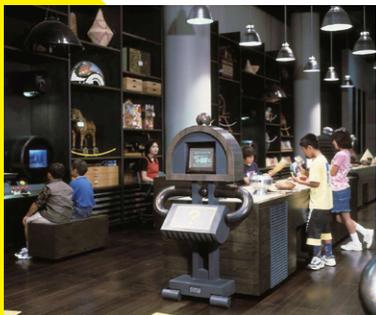
小山 腐れ縁(笑)。「さわる文字、さわる世界」の関連イベントとして開かれた国際シンポジウム「ユニバーサル・ミュージアムを

本館2階インフォメーション・ゾーン「探究ひろば」の「世界をさわる」コーナーでは、「見る」だけでなく「さわる」ことによって、展示資料をよりよく理解するための三つのコンセプトを提示している。

じっくりさわる
トキのダッチカービングなどの彫像をゆっくりさわって資料の形や手ざわりを味わう。

見てさわる
資料を手にとり、キャプションや解説を読みながら、全体の形、細部の構造などを視覚と触覚によってしっかり確かめる。

見ないでさわる
ブラックボックスに手を入れて、視覚にたよらず触覚だけで資料の形や細部の様子を把握する。



かつて民博にあった「ものの広場」コーナー



企画展「さわる文字、さわる世界」の入り口に展示された神社模型。2006年民博

考える」はインパクトがありました。世界各国の取り組み、先進的な理論と実践事例を知ることができ、私たちの方向は間違っていないと自信を持ちました。すいはくでは二〇〇六年九月から実験展示「さわる——五感の挑戦」を始めました。会期も短く小規模なものでしたが、試行錯誤しながら五年間続けました。そこでは、予想外の発見が多数ありました。弱視や視野狭窄など、視覚障害者も十人十色である

こと、特養老人ホームの高齢者たちが「さわる展示」に興味を示したことなど。広瀬さんの企画展の成功と、この実験展示の展開を背景に、「ユニバーサル・ミュージアム研究会」がスタートします。

広瀬 欧米の大きなミュージアムには障害者対応を担当する部署があり、いわゆる当事者が「アクセシブル・コーディネーター」として運営にかかわっています。当事者の声を尊重する意識が定着している点において、日本は負けています。だから僕がアドバイザーとして、すいはくの実験展示に参加したことは、日本の博物館にとっても有意義だったと思いますね。アドバイザーの給料は出ませんが（笑）。

本物とレプリカ

小山 ユニバーサル・ミュージアム研究会では各地で講演会やワークショップを開きましたが、展示資料をさわることは否かについて、議論が沸騰しましたね。「モノは情報であり、いつか滅びる。だから、どんどんさわってもらえばいい」と主張する情報学の研究者もいました。一方、やはり学芸員たちは慎重派が多かったですね。

広瀬 貴重な資料を保存し後世に伝えていくことは、博物館の責務です。どんなに注意深くさわっても資料が破損する危険があります。不特定多数の人がさわれば、資料の劣化は避けられません。さわる意味は博物館の種類によっても違いますが、研究会の実践的研究成果は、さわることを切り口として、伝統的な博物館展示のあり方を問い直す大きな流れにつながったかなと感じています。

小山 保存と活用ということで悩みが多いのが考古学です。地中から拾ってきた土器などをつぎはぎし

さわる展示のあり方を求めて

吹田市立博物館のころみ

五月女賢司 吹田市立博物館主任（学芸員）

二〇一一年三月に、パレスチナ自治区のラマッラ博物館を訪問した。学芸員のフィラス・アケル氏によると、博物館は視覚中心の場なので、視覚障害者の対応が一番難しい、とのこと。遠く離れた西アジアで、視覚障害者の博物館利用の問題について意識を共有できたのだ。

ひるがえって、われわれ日本の学芸員は、どれだけ視覚障害者が感じるさまざまな「バリアー」を認識しているだろうか。すいはくでも二〇〇六年から毎年「さわる展示」を開催している。仏像や土器、和楽器のレプリカなど、多くの展示資料をさわることができ、視覚障害者にくわえ、高齢者、親子連れなどにも人気がある。しかし、残念ながらそのあり方はいまだ模索中であり、視覚障害者に開かれ、視覚障害者の経験が当事者の主体性をもって社会に発信できる博物館となるには、しばらく時間がかかりそうである。

せっかくの「さわる展示」の経験を、これからの展示や研究などの博物館活動に生かすためには、「さわる展示」の展示室で展開さ

れている来館者の行動や声を意識的に収集する姿勢が必要である。また、視覚障害者やその支援団体とともに展示企画をおこなうことが重要だ。このように、単なる資料にさわる場の提供ではなく、来館者の声を記録し別の来館者に橋渡ししたり、視覚障害者やその支援団体と協議を重ねたりするなど、常により良い対話空間をつくらうとする姿勢をもつことで、博物館はあらゆる人たちに開かれた存在になるのである。



すいはくで開催した「さわる展示」の展覧会解説書の表紙（吹田市立博物館、2011年9月刊行）。無色透明な紫外線硬化樹脂インクによる点字と触図で構成している

「時間」の壁を超えられるか!?

レプリカの可能性

鈴木康二 公益財団法人滋賀県文化財保護協会企画調査課主任

二〇一一年初夏、当時所属していた安土城考古博物館を会場に、考古資料、なかでも「青銅鏡」を素材にした「さわる」体験プログラムを開催した。

まず、模鑄品（製作当時の様態を復元したものに触れてもらうことで、金属製の「鏡」そのものに慣れることから始めた。形は少し抽象化されているものの、材料や質感は本物に近い。想像以上に実感としての「古代の

模鑄品の鏡をさわって楽しむ
(撮影・さかいひろこ)

鏡」を楽しみつつ、参加者は多くの「気づき」を口にした。続いて展示用複製品にさわった。見た目は本物と酷似し、形は正確に再現され、はいるものの、樹脂製なので質感は異なる。模鑄品に触れたときに比べて、さわることによる驚きや興奮は明らかに少ない。

ようやく本物の鏡にさわると、複製品・複製品を「楽しんで」きたその場の雰囲気や、少しだけ張りつめた空気に変わる。コーディネーターする学芸員の緊張が伝わった可能性もあるが、触る人各々が、何か異なる「雰囲気」を感じとっているようにもみえた。本物と、複製品・模鑄品との違い、「本物のもつ圧倒的な時間」の存在を、まさに実感した瞬間である。

しかし一方で、レプリカ、特に「質感」を伴う模鑄品の触察を通じて参加者が示した多くの「気づき」は、まさに「楽しみながら、感じ、学んだ」ことを示している。「みる」ことへのこだわりから解放されたときにこそ、レプリカのもつ可能性は広がり始めるのかも知れない。





ワークショップ「まん〇(まる)ねん土をつくって、美術館に展示しよう!」でオリジナルの土器を制作する。
2011年すいはく(撮影・藤田京子)

て修復したら、貴重なのでさわるなというわけだし(笑)。だから、レプリカが出てくるわけです。

広瀬 僕が本物とレプリカの関係を真剣に考えるようになったきっかけは、研究会のワークショップで訪れた青森の三内丸山遺跡で、本物の縄文土器にさわったときの衝撃です。まさに「縄文との接触、縄文からの触発」と称すべき体験でした。それまでも縄文土器を触察したことはありましたが、落とさないように、壊さないようにこわごわとさわっていました。一般に、博物館における障害者対応は、学芸員やボランティアが誘導して、一部の展示資料にさわることが特別に許可するというのが基本です。ところが三内丸山の収蔵庫では全盲者が自由に動いて、棚に収められた土器をさわっていた。いわば「放し飼いの状態です(笑)。あの興奮がユニバーサル・ミュージアム研究会推進のエネルギーになったような気がします。

小山 収蔵庫には土器が五〇〇〇個以上あるそうです。実物の「オーラ」を感じたということですか。

広瀬 やはり本物ならではの迫力があるわけです。

僕は博物館資料にさわる意義として、「触学(さわって学ぶ)」「触楽(さわって楽しむ)」「触愕(さわって愕く)」の三つを挙げています。縄文土器の形や文様を学んだり楽しんだりするのは、レプリカで十分です。土器の特徴を知るための学習には、レプリカの方が適している場合もあります。けれども「さわって愕く」はどうでしょうか。一万年とか五〇〇〇年前に、ここで暮らしていた人びとがいる。自分たちのご先祖様が実際に手で創り使っていた土器を二一世紀の今、僕が手にしている。土器を介して縄文人と握手する感動は、本物でしか味わうことができないでしょう。

さわるマナーの普及

小山 この研究会では単にさわるだけでなく、「創る」ことを重視しましたね。

広瀬 三内丸山のワークショップでは、まず本物の縄文土器に実際にさわってイメージを膨らませて、最後にオリジナルの土器を制作しました。手を駆使して作品を生み出すワークショップは、研究会メンバーの触覚を鍛える機会ともなりました。もちろん素人作品だから、ひとつひとつは稚拙ですけど、それなりの数が集まると「心に触れる」何かがあります。

小山 広瀬さんを陶芸作家にして一儲けしようともくろんでいたんだけど(笑)。

広瀬 まだ、あきらめていないですよ。

小山 ベトナムの現代美術館には南ベトナム解放民族戦線の兵士のブロンズ像が展示されています。多くの来館者がさわるので、像がすり減ってピカピカになっています。これは劣化でも破損でもなく、愛

情を持ってさわることのすごさ、尊さだと思っています。広瀬 それはモノに対する敬愛の念でしようね。展示場において、優しく、ゆっくり「モノとの対話」を実践することが大事だと思います。多様な人びと、文化の存在を尊重する優しさが博物館から社会に広がっていくことを期待しています。

小山 博物館では資料にさわる際、いろいろと厳しいルールが決められています。それでは、三二一の大震災の後、何が起ったのか。大切に保存されていたはずの文化財が一旦になくなってしまった。その事実をどう考えるのか、保存を金科玉条とする博物館のあり方を再考すべき時期だと思います。一方、さわって鑑賞する側にも問題があるのは確かです。すはいはくの実験展示でも、展示物がけっこう壊れました(笑)。ですから、私も正倉院の宝物などを自由にさわらせろとまでは言いません。

広瀬 僕は「手学問」という言葉を使っていますが、「さわる=壊れる」という常識を打破し、さわることの豊かさ、奥深さをきちんと伝えていくべきでしょう。ルールを押しつけるのではなく、優しくさわるマナーが自然に来館者に根づくような展示が理想です。

小山 どうも日本の博物館は教育を振りかざして、上から「教える」という姿勢が伝統的に強い。遊びのなかから育まれる自発的・能動的「学び」の効果が考えられていない。

広瀬 民博は創設以来、ガラクタ博物館と宣言し、露出展示を基本理念としてきました。手が届く展示資料にはさわってもよかったです。開館から三〇年余が過ぎ、最近ではさわることをなかなか積極的にアピールできない状況になっています。そもそも梅棹忠夫先生の展示ポリシーとは、どういうものだったのですか。

エデュケーターの役割

——メトロポリタン美術館の事例から

おたか みゆき
放送大学客員准教授

博物館のエデュケーターは、利用者の博物館経験の充実に寄与することを職務とする専門職員で、とりわけ重要な役割は、来館者の鑑賞経験を支援することである。さわって展示物を味わうという触覚による鑑賞は、万人にとって重要であるが、とりわけ、視覚に障害のある来館者にとっては、わかりやすい説明と触覚を活用した鑑賞が必要である。米国の博物館では、必ずしもさわられる展示物ばかりではないなどの、展示の限界に対応すべく、来館者とエデュケーターとのコミュニケーションが重視されている。

例えば、ニューヨーク市にあるメトロポリタン美術館の、視覚に障害のある人向けの月一回の無料の素描プログラムは、エデュケーターと参加者のコミュニケーションによって展開される。このプログラムでは、展示室で古今東西の美術品から毎回一点を鑑賞し、それにヒントをえて、スタジオで各参加者が自由に素描やカラージュ(貼り絵)などを制作する。

エデュケーターは、展示室では、作品の大



19歳の男性の参加者が制作した作品
(60.8cm×45.7cm)

小山 梅棹さんの頭のなかにあったのは、大学博物館なのだと思います。それは資料の素材や製法を確かめたり、分析したりする場所です。民博だけの問題ではありませんが、いつの間にか日本の多くの博物館は宝物を見せる文化施設になってしまいました。日本人はモノ信仰が強いので、そうなったのかもしれない。お宝を集めているのではなく、フィールドワークの成果をみてくださいたいというのが梅棹さんの考え方だったと思います。

手探りから手応えへ

小山 ユニバーサル・ミュージアム研究会の活動が各方面に波及したひとつの要因は、メンバーの多様性だと思っています。まず、若手研究者が世界の博物館を实地調査し、最新の動向を紹介してくれた。

広瀬 研究者とは一味違う斬新なアイデアを出してくださったのは、アーティスト系の方々です。また視覚障害当事者もいました。僕と小山先生の人脈がうまくミックスされて、まったく異なる個性、専門分野を持つメンバーを結びつけることができました。

小山 三年間の活動を締めくくる公開シンポジウム「ユニバーサル・ミュージアムの理論と実践」は全国から二〇名以上の参加者を集めました。発表内容が充実しており、出席者も博物館関係者を中心に、じつに多彩でした。たいへんな熱気を感じましたね。研究会がこんなに盛り上がるなんて、私も広瀬さんも予想していませんでした。

広瀬 机上の理論ではなくて、お金がないなか、自分でいろいろ工夫し、展示やワークショップを企画している人たちの実践報告だったので、説得力があり、話もおもしろかった。美術館関係者もたくさん来て

いました。近年、さまざまな技法を用いて「さわる絵画」が開発されています。一般に美術館は収蔵品の性質上、保守に力点を置いている館が多いのですが、そこを変えていく起爆剤となるのが、さわる絵画だと思います。

小山 二次元表現の絵画をレリーフ化するのには、どうも余計なお世話みたいな気がします。やはりモナリザの絵だったら、本物をさわって鑑賞したいのではないのでしょうか。

広瀬 さわる絵画の研究はまだ始まったばかりですし、賛否両論があるのは当然です。さわることを日常としている視覚障害者、実際に作品を制作するアーティストが率直に意見を出し合えば、先生をうならせるような傑作もできると思います。美術館スタッフから「さわる絵画を触察すると、見ているだけでは気づかないことを発見できる」というコメントがありました。この発言により、さわる絵画は視覚障害者だけのものではなく、ユニバーサルな展示物になりうる自信を得ました。



ユニバーサル・ミュージアム研究会の成果のひとつ、『さわって楽しむ博物館』の表紙(青弓社、2012年5月刊行)

研究会の成果

小山 青森で研究会をおこなった際、三内丸山遺跡の後に県立美術館を訪問しました。本物の縄文土器をさわってワクワクしていたのに、美術館では何もさわらせてもありませんでした。しかし、青森県立盲学校の働きかけなどもあり、昨年には県立美術館で「さわる現代アート」の特別展が実施されました。これも私たちの研究会の副産物といえますね。



さわる絵画「モナリザの微笑」と「姿見七人化粧」。2011年10月民博で展示(撮影・藤田京子)

ベン・シヤーンをさわる、見る、聴く ——平面作品への重層的なアプローチ

真下 弥生 ルーテル学院大学非常勤講師

二〇一一年二月、米国の画家、ベン・シヤーンの小品展を、東京・早稲田のブックカフェで開催し、彼が挿絵を描いたクリスマス・カードや書籍約二〇点を展示した。約五〇年前、米国の一般的な書店やギフトショップで流通していたものだ。

この展示では、立体コピーを使用したシヤーン作品の触図と音声ガイド、点字・拡大文字による解説を制作した。視覚のみならず、触覚や聴覚を用いて平面作品を鑑賞する試みの一環として、展示したカードや書籍本体も直接手に触ることが出来るようにした。当時の人びとがしていたように、好きなだけページを繰ったり、裏返して見たりすることも出来る。大量生産のモノではあるが、触ってみると、使われている紙の感触は決して一律ではなく、シヤーンが多様な紙を使い分け、質感に合った画材で絵を描き、レイアウトやサイズを工夫していたことが伝わってくる。

五〇年前の紙資料なので、扱いは注意が必要だが、あまり但し書きを列挙すると鑑賞する側も緊張してしまう。考えた結果、薄手のビニールカバーをかけ、但し書きは「鑑賞後は元の場所に返してください」とのみとした。大きな賭けであったが、

二週間の会期中に破損や汚損はなく、来場者が大切に扱ってくれたことが伝わってきた。

その一方、夢中になって展示品の上でメモをとったり、荷物を置いてしまう人もいた。そのようなときは、テーブルが別に用意されていることを伝えると、概ねすぐにその意味に気がつき、移動してくれた。のびのびと展示品にさわることができることを奨励しつつ、保全に協力してもらう雰囲気づくりを今後も模索したい。



触図化した作品。右側が立体コピーによる触図

巡回して、後は各地の博物館の収蔵品を活用することもできますね。

夢は見るのではなく、さわるもの

広瀬 昨秋の公開シンポジウムでは、「何かをしなれば」という全国の博物館関係者の熱意が溢れていました。僕たちの巡回展プランに賛同してくれる館も出てくるかもしれない。「夢は見るのではなく、さわるもの！」なんてキャッチフレーズはどうですか。

小山 研究会の夜の部で盛り上がって、「アラブの春」のように、一カ所の取り組みが、全国に波及するよさな呼びかけができないかという提案が出ましたね。たとえば、一月一日は日本の点字制定記念日です。この日の前後一週間、全国の博物館に呼びかけて「さわる展示」をいっせいに立ち上げる。ロビーでも庭でもいい。とにかく「さわる展示」に取り組んでいまずというメッセージを発信してもらおう。これならさほどの資金は必要ないですね。

広瀬 最後に僕の夢、今後の展望を述べたいと思います。もちろん、民博の「世界をさわる」コーナーを拠点として、「博物館の再検討」「さわる展示の普及」に引き続き努力するつもりです。しかし、そこにとどまらず、博物館から社会を変えていこうと強く感じるようになりました。福祉のまちづくりとか観光のユニバーサル・デザイン化というテーマが近年もてはやされています。まちづくりや観光も視覚要素に偏っているので、僕たちの研究会の議論が参考になるはず。福祉や障害者サービスという発想でなく、「さわって愕く」という観点から、まちづくりや観光にも積極的にかかわっていきたいと考えています。



みんなく公開講演会 ヨーロッパと日本の宗教 問いなおされる救済のかたち

藤本 透子
民博 機関研究員

民博は、2006年から毎年春に、毎日新聞社と共催でみんなく公開講演会を開催している。
今回は、ヨーロッパと日本の宗教を、罪と救済、来世と現世などに着目してとりあげた。

宗教を信じますか？

この問いに対して「無宗教」あるいは「信仰をもたない」と答える日本人は、宗教意識調査で七〇パーセントにのぼる。その一方で、神社でお守りを買ったり、お寺にお墓参りに行ったことがない人は、むしろ少ないだろう。

日本では、神仏に対する感覚は、生活のなかでほとんど意識されないまま存在しているといえるかもしれない。しかし、病气や死などの苦難に直面して心のよりどころが真剣に求められるとき、宗教は重要な問題として立ちあらわれる。また、世界に広く目を向けると、イスラームなど宗教への関心が改めて高まっている地域もある。

二一世紀は「宗教の世紀」ともいわれるが、宗教について語ることに一種のタブーがつきまとう。春の講演会では、正面切って論じられることの少ないこのテーマをとりあげ、キリスト教と仏教というきわめて性格の異なる宗教を対比させて、罪と救済、現世と来世、共存などの問題について論じた。

罪と救済

本館の新免光比呂准教授によると、キリスト教は複雑に発展してきたが、教えを大胆に簡略化すると、①原罪→②受難→③復活→④最後の審判という流れになる。この



長崎の万国霊廟長崎観音 (撮影・保坂俊司)

日本人は生と死を深くリンクさせ、決して分離して考えてこなかった。死者の魂の供養を日常生活のなかでも重視し、その存在に畏怖と敬意を惜しまない。死者を重んじて来世を問題とすることは、日本的な仏教のあり方である。

日本の宗教観について、保坂教授は、すべてのものの背後に唯一なる存在（神、仏、あるいは法）が想定されていると指摘し、これを「二元多現教」と名づけた。自然だけでなくモノにすら魂が宿るとされ、すべてを拝み讃えることは大いなるものを讃えることにつながるという思想である。「宗教」は翻訳語なので、こうした日本の状況を反映していない。このため、自らを「無宗教」とみなす人が多いと考えられる。

共存の思想

パネル・ディスカッションでは、大震災以来とびかかっている「絆」ということばについても論じられた。イエスの受難、つま



生神女就寝祭で信者がおこなう罪の告白は、感情のカタルシスともなる。1995年、ニクラ ルーマニア (撮影・新免光比呂)

教えを基盤としながら、キリスト教は、長い歴史のなかで地域や民族とかわりながら、カトリック、正教会、プロテスタントの三つの宗派に大きくわかれていった。

キリスト教の神は、唯一で絶対的な至高の存在であるため、罪を悔い改め救済を求めるに際して、神と人のあいだに媒介となる存在が必要とされてきた。ロシア正教などの正教では、キリストや聖家族を描いたイコンをとおして、人は神と出会う。また、カトリックにおける聖母崇敬や聖者崇敬はよく知られている。プロテスタントでは、こうした崇敬はすべて否定される。神への取りなしはなく、聖書をとおして神に向き合い、賛美歌によって神を讃えるだけである。一方、中央大学の保坂俊司教授によると、仏教の場合は、罪とは他者から押し付けられたり人に与えたりするものではなく、

り十字架の上で人類に代わって自らの身を差し出したイエスの行為が、キリスト者にとっての愛と絆の原点にある。一方、絆という漢字には足を縛るという意味もある。一蓮托生となつて自分の罪でないものを引き受けること、人の苦しみを引き受けて、自分の身を犠牲にしてみんなを救うことが、絆の仏教的解釈だという。宗教は人と人の共存、さらに人と自然の共存をも可能にしていく思想の源となっていることが、講演会では論じられた。

今回の講演会で、申し込みが定員を大きく上回り会場が満席となったことは、テーマに寄せられる関心の高さを示していた。時間の関係で、より踏み込んだ議論ができなかったことは残念であったが、この講演会は、幅広い視野に立つて宗教への理解を深めるきっかけになったと考えられる。

みんなく公開講演会

「ヨーロッパと日本の宗教」

——問いなおされる救済のかたち——

二〇一二年三月一六日、大阪市北区のオーバルホールにて開催。毎日新聞社共催。

【講演】

「ヨーロッパにおけるキリスト教」

——地域・民族・生活の視点から——

新免光比呂 (民博 民族文化研究部)

「日本人の宗教観——多元な共存を可能にする思想とは」

保坂俊司 (中央大学 教授)

※加えて野林厚志 (民博 研究戦略センター) 司会進行

でパネルディスカッションをおこなった。

今回の公開講演会は一〇月二六日 (金) 東京にて、日本経済新聞社共催で開催予定。



正教会の特徴であるイコノスタシスで仕切られた教会の内陣。2010年、ベオグラード セルビア (撮影・新免光比呂)

自分で罪を作り自分で引き受けるという自業自得の考え方が主流である。キリスト教と仏教では、同じ「罪」ということばでも意味が大きく異なっている。

現世と来世

キリスト教では、最後の審判を終えて赴く天国と地獄が来世にあたり、生者は死者の運命に干渉できない。ただし、カトリックには煉獄という考え方があり、供物をそなえると死者の状態はよくなる。また、ルーマニアのように、墓に行つて死者と語り合う文化をもつ地域もあり、ドラキュラの原型であるルーマニアの民間伝承では死者の帰還も語られる。

インドで誕生した仏教はもともと合理的な宗教で、来世の有無は問題にされないが、

夏休み、みんなくの観覧料が
無料になります！

期間 7月21日(土)～8月26日(日)
くわしくはホームページ、電話でご確
認ください。

夏のみんぱくフォーラム2012
知りたい、触れたい、調べたい
「みんなく流」探究のすすめ

会期 8月25日(土)まで

■関連イベント

◆連続講座(全6回)
「博物館にさわる」

「さわる」をテーマにしてユニークな研究・
実践に取り組んでいるゲストを招き、幅広い
角度から「さわる展示」の魅力と可能性を伝
えます。

▼7月14日(土)「サワッテ ミル カイ」
講師 大野照文
(京都大学総合博物館教授、古生物学)

みんなくセミナー

会場 国立民族学博物館 講堂
時間 13時30分～15時(13時開場)
定員 450名(当日先着順)

参加費 無料(展示をご覧になる方は、観覧料が必要です)

第410回 7月21日(土)

「探究ひろば関連」

情報アクティビスト宣言——市民の知的探究と博物館
講師 飯田卓(国立民族学博物館准教授)



みんなくは、古いもの
を展示するだけでなく、さまざまな読
みものや映像資料をも提供する総合メ
ディアです。その役割は、インターネット
が普及したこんにち、どのような意味
を帯びているのでしょうか。とくに近年利
用が盛んなインターネット上の双方向メ
ディアを意識しながら、市民レベルの知
的探究と博物館の役割を考えます。

第411回 8月18日(土)

「探究ひろば関連」

ソーシャルメディアに見る人とモノの関係
講師 濱崎雅弘(産業技術総合研究所 客員研究員)

聞き手 中村嘉志(国立民族学博物館 客員教員)
今回はこれまでとは少し毛色の異なる話題をお届けし
ます。人と人の関係を、コンピュータネットワーク上
でのデジタル作品作りの視点から考えてみます。デジ
タル作品と聞くと無味乾燥なイメージを抱く方も多
いと思います。しかしそこにはモノと人、人と人との関
係に依拠したモノづくりが存在します。意外に泥臭い
ものです。これらを近年流行のソーシャルメディアと
絡めてお話しします。

▼7月16日(月・祝)「さわる子、育て——触発の育児論」
講師 小西行郎(同志社大学赤ちゃん学研
究センター教授、発達神経学)

▼7月28日(土)
「触れることから生まれる武道」
講師 嶋本勝行(大阪府合気道連盟理事長)
各日13時30分～16時(開場13時)
場所 第5セミナー室(先着100名)
※参加無料、申込不要

企画展「写真で見る東日本大震災と被災文化遺産」

「路上のソリスト」
日時 7月14日(土) 13時30分～16時30分
(開場13時)
会場 講堂(先着450名)
※参加無料、申込不要
※当日10時から講堂入口にて整理券を配布

企画展「写真で見る東日本大震災と被災文化遺産」
のレスキュー」
9月27日(木)から開催の企画展「記憶をつ
なぐ——津波災害と文化遺産」で使用予定
の写真パネルを事前に公開し、展示の一部を
紹介します。

会期 8月21日(火)まで
会場 企画展示場A

みんなく映画会「みんなくワールドシネマ」
「インド・クワシック映画特集」
インドの各地・各言語による、不朽のクラ
シック名画を、その時代、背景などについて
の解説つきで上映し、インド文化への理解を
深めます。

▼7月15日(日)「放浪者」
1951年、ラージ・カプール監督、
ヒンディー語、175分
解説：溝上富夫(大阪外国語大学名誉教授)

▼7月16日(月・祝)「踊り子」
1981年、ムサツアル・アリー監督、

みんなく映画会「みんなくワールドシネマ」
「インド・クワシック映画特集」
インドの各地・各言語による、不朽のクラ
シック名画を、その時代、背景などについて
の解説つきで上映し、インド文化への理解を
深めます。

▼7月15日(日)「放浪者」
1951年、ラージ・カプール監督、
ヒンディー語、175分
解説：溝上富夫(大阪外国語大学名誉教授)

ウルドゥー語・ヒンディー語、145分
解説：田森雅一
(国立民族学博物館外来研究員)

▼7月22日(日)「音楽ホール」
1958年、サタジット・レイ監督、
ベンガル語、99分
解説：サンディップ・K・タゴール
(追手門学院大学名誉教授)

▼8月4日(土)「ジャンカラバラナム」
1979年、K・ヴィシヌワナート監督、
テルグ語、145分
解説：寺田吉孝(国立民族学博物館教授)

▼8月5日(日)「第一の敬意」
1985年、バーティライラー監督、
タミル語、163分
解説：杉本良男(国立民族学博物館教授)

以上映画会の開催場所 講堂(先着450名)
※参加無料、申込不要

国際シンポジウム
手話言語と音声言語のシンポジウム(1)
「言語の記述・記録・保存」
日時 7月29日(日) 9時～17時30分
会場 講堂(定員450名)
※参加無料、要申込
※同時通訳(英語・アメリカ手話・日本語・
日本語手話)あり

夏休み子どもワークショップ
自由研究はこれで解決！「働く」って何？
——アフリカの人の生活を見てみよう！
日本とは異なる、アフリカの人の仕事や
働き方を学び、大きな絵本を作ります。
日時 8月21日(火) 10時30分～16時30分
(受付10時より)
会場 本館展示場内ナビひろば他
対象 小学3年～6年生(保護者同伴であ
れば小学1、2年生児童も参加可能)
※参加無料、要申込

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 国立民族学博物館 第5セミナー室
定員 96名(当日先着順、会員証提示)

第410回 8月4日(土) 14時～15時
ビルマ/ミャンマーの「絆」の力

講師 田村克己(国立民族学博物館教授)
ビルマ(現国名ミャンマー)は、今もとも注目をあびて
いる国のひとつです。ここでは人と人とのつながりがとて
も大切です。ビルマの人間関係のあり方をおしてこの
国の魅力を紹介し、私たち自身の社会もふり返って考え
てみましょう。

第411回 9月1日(土) 14時～15時
聖書を生きたる人びと

講師 吉田憲司(国立民族学博物館教授)
南アフリカやジンバブエ、ザンビアなど南部アフリカは、
現在、地球上でキリスト教が最も急速にひろがっている地
域です。治療儀礼など伝統的な信仰とのせめぎ合いの中
で、聖書の世界を忠実に生きようとしている人びとの姿
を追います。

第412回 9月22日(土) 15時～17時
アフリカを食べる

講師 竹沢尚一郎(国立民族学博物館教授)
西アフリカのニジェール川流域に暮らすボソの人びとは、
米を主食とし、副食に魚を食べるといって日本と似通った
食生活をしています。昔ながらのやり方で魚を追って暮
らす彼らの生活を、映像を用いながら紹介します。

講演会終了後にはマリやセネガルなど西アフリカ地域の
家庭料理をじっさいに味わう食事もおこないます。(食
事は17時半～19時)

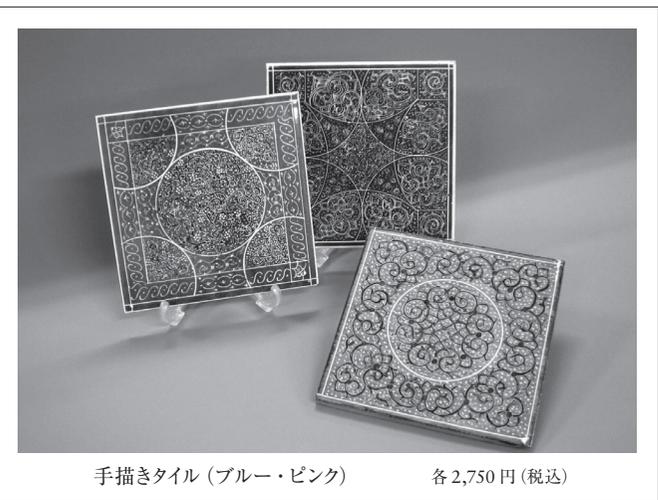
参加費 講演会のみ3000円(会員外5000円) ※飲食物付
食事は3500円(会員外4000円)

※講演会参加費含む。食事会の内容など詳細は、
「友の会」まで。

会場 レストラン「カラバッシュ」
(JR浜松町駅から徒歩すぐ)

定員 40名(要申込)

国立民族学博物館友の会 電話06-6877-8893(平日9時～17時) FAX06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/ e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp



手描きタイル(ブルー・ピンク) 各2,750円(税込)

国立民族学博物館
ミュージアム・
ショップ

電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

イランの手描きタイル(ペルシャタイル)

イランの手描きタイルは、職人がひとつひとつ丁寧に
手描きした、世界で一枚だけのタイルです。

お気に入りの額に入れて飾ったり、花瓶敷きを利用し
たり、他のタイルと組み合わせたりオリジナルのテー
ブルを作ってみたりと、いろいろとお楽しみいただけます。

博覧会事務局研修ワークショップ2012 in みんなく
「学校と博物館でつくる国際理解教育
——新しい学びをデザインする——」

国立民族学博物館を活用した国際理解教育
の実践事例の紹介やワークショップを通して
国際理解教育における博覧会連携の意義や可
能性について考えます。

日時 8月7日(火) 10時20分～17時
(受付10時より)

会場 セミナー室及び本館展示場内

【第一部】講演とミュージアムツアー
【第二部】ワークショップ

※参加無料(定員に余裕があるワークショップ
は、当日参加も可能です。)

※イベントや刊行物について、くわしくはホーム
ページをご覧ください。

※電話でのお問い合わせ受付時間は9時から17
時(土日祝を除く)です。

刊行物紹介

■白川千尋・川田牧人 編
『呪術の人類学』
人文書院 定価：5,250円



呪術は、日常の
なかで具体的に
どのように経験・
実践されている
のだろうか。人を
非合理的な行動
に駆り立てる、
理論と実践、言語と身体
のあわいに迫る。

■岸上伸啓 著
『捕鯨の文化人類学』
成山堂書店 定価：3,990円



歴史的に見れば、人
類はクジラを食料資
源やその他の資源
として利用してきた。
本書は、現代の捕鯨
問題を念頭におき
つつ、世界各地の捕
鯨や捕鯨文化の歴史と現状を学際
的に比較検討した論文集である。

国民国家の境界を書きかえる試み フランス・国立移民史博物館（シテ）

田邊 佳美

一橋大学大学院・パリ第13大学博士課程

地球
ミュージアム
紀行

国史は、国家の成り立ちと、それを共有する「国民」を規定するものである。では「移民」の人びとの歴史は、国民国家のなかでどのように位置づけられるのだろうか。

国立博物館でそれを問いかけたとき、

「国民」とその外部を隔てる境界線のゆらぎが浮かびあがってくる。

〈移民の記憶〉を保存する

二〇〇七年一〇月、パリにあらたな博物館、国立移民史シテ (Cité Nationale de l'histoire de l'immigration、以下シテ) が誕生した。「博物館 (museum)」ではなく、「シテ (cité)」と名づけられたのは、「市民が集まり議論する場」の意味合いをもたせるためとされるが、その名が暗示するように、シテの設立背景は他の博物館と一線を画している。すなわちシテは、一八〜二〇世紀のフランスにおける移民史を広く知らしめることを使命とする一方で、現代のフランス社会における「移民」をめぐる政治と切り離せない関係にある。

シテ設立の発端は一九八〇年代に遡る。この時期、「自分の父親や母親の人生にかかわる歴史を学ぶ機会が学校や社会にはかけている」という問題提起が、移住者の子どもたちを中心に活発化し始めていた。これに対して、先駆的な移民史研究者だったG・ノワリエルが、仏歴史学における「移民の記憶の排除」を指摘したことをきっかけに、一九九〇年代はじめには「移民史を保存する施設」の創設を国家に働きかける知識人の運動がおこる。しかし、計画の承認と設立の決



シテのエントランス。ここはかつて植民地博物館だった

定までにはさらに一〇年以上の歳月がかかった。

政権が計画の推進を躊躇した背景には、移民史の承認が、歴史的なフランスの国家理念および「移民」概念の位置づけと必ずしも合致しないという理由があった。フランスは、国民のあいだに特定の社会・文化集団の存在を想定しない国家理念をもつ。移民史を国民内部の一集団の歴史として表象することは、この理念に反するとして問題視された。さらに、「移民」という概念が歴史的にナショナル・アイデンティティの外部におかれ続けてきたことも計画の推進を躊躇させた。国立博物館の設立という形で国史における移民史の重要性を承認することは、国民国家の境界を書きかえ、その内部に「移民」を位置づけ直すことを意味したからである。

「国民」とその外部の境界で

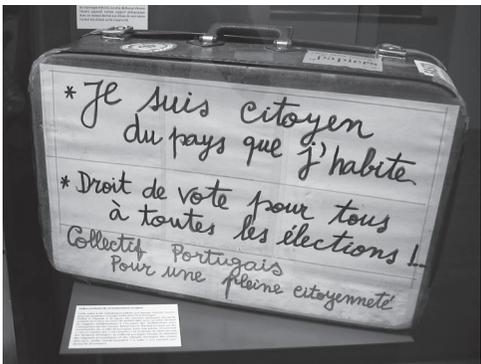
他方で、この計画は移住者やその子どもたちの抵抗も引き起こした。博物館の設立が国家プロジェクトとなると同時に、国家への十全な帰属を求める移民統合政策の一環に位置づけられたためである。シテの博物館常設展示には、移住者の個人史とともに彼／彼女らの所持品が展示されているが、これらは、ほぼすべて「寄託」の形で提供されたものである。当初、所持品の寄贈を求めた博物館に対して、移住者らはそれを拒否したのである。この出来事は、国立博物館による移民史の承認が、自らの所持品が象徴する個人史の所有権、そして帰属の選択権をも国家に引き渡すことを求める側面を含むことへの移住者らの抵抗を示している。

このように、〈移民の記憶〉の承認は、移住者やその子どもたちにとって現在と未来にかかわる問題だった。もともと、シテ設立により「移民」が国民国家の内部における位置を保証されたわけではない。開館直前の二〇〇七年五月、シテ設立を牽引した運動家や知識人を憤怒させたのが、当時の新政権による「移民・国民アイデンティティ省」の創設である。この省名は、国民と移民のあいだに再度境界を引くことを暗示した。むしろ、こうした移民排除の傾向から、移住者らに対する人種主義・差別の問題は深刻化している。それでもなお、シテの設立は「移民」をめぐる政治にあらたな可能性をもたらした。常設展示・企画展示やその他イベント・図書館・研究・教育機能に加え、移住者関連の市民団体のネットワーク拠点も兼ねるシテは、現在・未来の「移民」をめぐる政治と不可分である。これを象徴するように、二〇一〇年には、正規化を求めるサンバビエ（非正規滞在者）が二月月にわたりシテを占拠した。「移民」の地位すら認められない彼／彼女らは、シテを舞台に、その境界をさらに広げるよう国家に対し迫ったのである。今後もしテは、「移民」をめぐる政治と密接なかわりを持ち続けるだろう。

正規化を求めるサンバビエのデモの写真展示



移住者の所持品「スーツケース」。「わたしは、わたしが住む国の市民である。すべての人に全選挙権を！完全な市民権をもとめるポルトガル人団体」



移民史を物語る差別対抗運動のチラシ

現代アートを中心とした企画展示の様子



博物館常設展示の様子

住をめぐる旅 その1

家作りは本能か？

「子どものころにはまだ東京の郊外でもあちこちに空き地がのこされていた。空き地の一角に資材置き場があって、天井裏が秘密基地だった」と、筆者は語る。少年少女時代をふりかえり、「そういえば」と仲間うちの不思議な団結心を高まらせたあの場所、あのときを思い出す読者もいらつしやることだろう。秘密基地があった空き地はすでになく、基地メンパーもとうに解散して、それぞれの住まいや家庭を築いているかもしれない。人間が住まいを求める情動は、人間存在の本質にかかわるものなのだろうか。「住」をめぐって、旅立とう。

旅立ち

ある種の動物や昆虫は誰におそわるでもなく巣をつくる。人間もまた心の奥底にそのような情動をかかえているのではないか？この自明にみえた問いかけが、というよりも、学問を前提するテーマであり期待といってもよいが、いつしか私の心にさざ波をたてはじめた。地球上にはまだ身近な人間同士が協力して家屋を建てている民族がいる。そうした確信をよりどころに住まいの調査を続けてきたけれど、住宅だけが世界市場から取り残されているはずもない。それがどんなに伝統的なよそおいに彩られていたとしても、住むという行為自体が多かれ少なかれ国家の管理する住宅産業のしくみに巻き込まれているだけなのかもしれない。もし家作りが自動車のような商品でかまわないのだったら、もし人間の存在にとって本質的に重要なものではなくなっているのだとしたら、人の住まいを研究することの帰着点はいったいどこに求めたらよいのだろうか？



トンプソン・インディアンの竪穴住居。大地にいだかれて眠ることが人間の住まいの原型だった (Teit, James A. "The Thompson Indians of British Columbia", 1900)

間社会の生みだしてきた奇妙な（一）造形の数々がモノクロの写真で紹介されていた。西欧建築の伝統以外にも建築があるという、いまでは至極当然な事実にはじめて目を開かせた展示だった。機能性や合理性を旗頭に近代主義建築がまだ世界を席卷していた時代である。

この展示を風土的とか自然発生的とかまとめる以前に、人間も不思議な動物のひとつであることに気づかされた。ゾウやキリンを前にして、まずその造化の妙、創造の神秘にうたれる感覚に似ている。ゾウは自分の鼻がながい理由を訝（いぶ）かたりはしないだろう。鼻の短いゾウはゾウとよべないだけのことだ。



無意味に？デフォルメされた巨大屋根建築。ベトナム中部高地の共同家屋

いまでも続く地下生活の謎。中国黄土高原の窯洞（ヤオトン）住居



楽園の喪失
「人間が自分の家を建てることのなかには、鳥がその巣をつくるのとおなじような適合性が見られる」。そう書きつけるソローはマサチューセッツ州のウォルデン湖のほとりにみずからの手で丸太小屋を建設する（『ウォルデン』あるいは森の生活 一八五四年）。「建設の喜びを私たちは永久に大工のもとに手放してしまうのであろうか？」と家作りの理由を説いていたソローも、苦勞しては

はじめた森の生活を一年あまりで切りあげてしまう。本の出版はその七年後だ。
まさに、「かりのやどり、たが為にか心をなやまし、なにによりてか目をよるこぼしむる。そのあるじとすみかか無常をあらそふさま、いはばあさがほの露にことならず。或は露おちて花のこれり。のこるといえどもあさ日にかれぬ。或は花しほみて露なおさえず。さえずといえども夕をまつ事なし」（鴨長明『方丈記』二二二一〜）というありさま。あるいはまた、こんな文言をのこした先人もいた。

「その土地から得られる材料で、できるだけ早く、飾りもそっけもなく、むき出しに、自然が生きている人間が家なしでいることを許さないから、しかたなしにその工作を始めなければならぬのである。（略）彼らこそ大きな野の上に孤立して極度の単純生活を堂々と営んでいるんだと思うと、またたたらなくうらやましく感じられてくる。」（今和次郎『日本の民家』一九二三年）

家や家族について書かれたおびただしい本の列をみれば、住まいがいまもむかしも大きな問題として個人の前に立ちはだかつていることを知る。「こんな家に住みたい」「こんな家で死にたい」「逆

原点へ

一九六四年にニューヨーク近代美術館でおこなわれたひとつの展覧会が当時の建築界に波紋を投ずることになった。展示のタイトルは「建築家なしの建築」という。企画したのは『みつともない人体』などの著者として知られるバーナード・ルドフスキー。まるで動物の巣作りさながらに人間社会の生みだしてきた奇妙な（一）造形の数々がモノクロの写真で紹介されていた。西欧建築の伝統以外にも建築があるという、いまでは至極当然な事実にはじめて目を開かせた展示だった。機能性や合理性を旗頭に近代主義建築がまだ世界を席卷していた時代である。

この展示を風土的とか自然発生的とかまとめる以前に、人間も不思議な動物のひとつであることに気づかされた。ゾウやキリンを前にして、まずその造化の妙、創造の神秘にうたれる感覚に似ている。ゾウは自分の鼻がながい理由を訝（いぶ）かたりはしないだろう。鼻の短いゾウはゾウとよべないだけのことだ。

現代人の多くは住宅を商品として購入する。その建っている土地や規模や機能に多少の差異はあれども、商品は消費することで、はじめて商品たりうる。つまり、そこに住むという人間の営みがこの商品の価値を減じさせ、台無しにしてゆく。なにかおかしきはないだろうか？ どんなにキレイな宣伝文句をならべても、この住宅という商品にとっては、おまえの人生などないほうがよい。そう宣告されているようなものではないか！

佐藤 浩司
民博民族社会研究部



川のほとりか、すくなくとも水道栓のちかくに、所有権のおよばぬ手頃な空き地をみつけて、つかのまの居住地をさだめる。つかのまが一日であっても、一生のことであってもたいしたちはない。そこに四本の木の枝を突き立てて、枝の先を横木でむすびあわせ、こうしてできた骨組みのうえに段ボールをのせるだけだ。風よけといっても風がよけられるわけなし、たとえ太陽の直射はふせげたにしても、毎日のおそろ熱帯のスコールのまえに、紙の屋根はひとたまりもない。けれども風よけは、都市という大自然のなかで、彼らがひとつ屋根の下に身をよせあい、生きてこの世にあることの証明だから、風よけのない彼らじしんなどは存在しないから、力強く、たくましく建ちつづけるのだ。（佐藤浩司「夢をつむぐ…都市の採集狩猟民」布野修司（編）『見知らぬ町の見知らぬ住まい』彰国社 1991年）

貧困から抜け出す力

— 民主的な人と文化の育成

たとえ多額の援助をしたとしても、立派な建物を建てたとしても、それだけでは持続可能な開発援助は難しいかもしれない。現地の人びとが自ら自身が主体的に活動すること。そのことが社会をよりよい方向に変えていく原動力となり、やがては困難を克服することになるだろう。

フィリピンの人びととともに

アクセスー共生社会をめざす地球市民の会は一九八八年に結成され、一九九〇年からフィリピンで貧困削減に取り組んでいる国際協力NGOである。保健衛生、教育支援、生計向上、青年育成などで貧しい人びとの日々のニーズに応えながら、奨学生会・保護者会、ヘルスワーカー、生産者団体などの組織化を通じて住民の集団的エンパワメント（自分たちで協力し合って問題を解決する力を育てること）に力をいれて活動している。なかでも、フェアトレード・プログラムは、商品の生産・販売活動を通じて、貧しい人びとを生産者団体として組織し、互いに協力して貧困から脱け出す力をつけようというものである。

アクセスの特徴は、フィリピン現地法人を組織し、フィリピンの貧しい人びとのエンパワメントをフィリピン人・日本人スタッフが直接おこなっていること、そして日本人に所属する学生を中心とするボランティア支援チームがフィリピンのスタッフや住民と直接協働関係を作り、プログラムの運営に関与していることにある。

シヨップなどに販売網を広げる一方で、年に一〜二回フィリピン現地を訪れ、生産者たちと一緒に商品開発をおこなってきた。

プログラムに参加する住民の多くは女性である。働きたくても仕事が見つからず、主婦をしていた母親がほとんどだ。「以前は、空いた時間はおしゃべりして過ごすしかなかった。今は、家事・育児との両立が大変とはいえ、注文さえあれば、子どもに三食食べさせ、学校に行かせることもできるようになった」と言う。彼女たちが今、何よりも欲しいのは「もっと多くの注文」だ。自分たちの労働によって収入を増やすことができる。こうした自助努力の成果が収入という具体的な形となってあらわれるため、自尊の気持ちも高くなる。「与えられる」ことを基本とするチャリティーとの最大の違いだろう。

受注の配分、品質管理、商品開発、原材料の調達、国内販路の拡大など、生産・販売のあらゆる部分をフィリピンの生産者自身がおこなおうとしている点も、チャリティーとの大きな違いである。もちろん、日本のフェアトレード事業部に頼っている面もまだまだ少なくないが、少しずつ生産者自身で運営できる分野が広がっている。算数が得意だった女性が会計担当になったり、英語が得意な女性が日本人スタッフとのあいだの連絡担当になったり……と、生かされてこなかった女性たちの能力に活躍の場が与えられるのも、フェアトレード・プログラムの良さといえるだろう。

ココナッツ雑貨が、女性たちの暮らしを変える

プロジェクト地のひとつケソン州アラバット島ペレーズ地区で、ココナッツの殻を使った雑貨やアクセサリを生産している生産者団体マパヤパとアクセス日本のフェアトレード事業部を例にとろう。一九九九年、アクセスが主催するスタディツアーに立命館大学の学生二人が参加した。この学生たちは、もともとフェアトレードに関心をもっていたため、椰子の木が生い茂るアラバット島の様子を見て、ヤシ殻を使った商品を生産すれば日本で売れると考え、ツアー終了後企画書を作成し、アクセスのフェアトレード事業を立ち上げることを提案した。翌年大学を休学し、六月から二月までフィリピンに滞在した二人は、ペレーズ地区に住み込み、アクセスのフィリピン人スタッフのサポートを受けながら、住民アンケート、商品規格の作成、生産者の募集、生産者のトレーニング、商品買い取り価格の設定、生産者団体の規則作り、などをおこなった。その後、二人はフェアトレード事業部を立ち上げ、学生ボランティアアスタップとともに、大学生協やフェアトレード

「ボス一家の家族経営」を越えるものを

むろん、良いことばかりではなく、克服すべき課題は多い。第一に、受益者たちが自ら組織を作り運営するためには、意思決定のしにくみ、決定事項の遂行のしにくみ、会計など資産管理のしにくみなど、組織運営に関する最低限の知識と技能が必要だ。そして、これが容易なことではない。まず、単純に事務作業に慣れていない人が多い。教育を受ける機会を奪われ、事務作業を必要とする仕事につく機会を逃してきたことの結果である。

だが、何よりの課題は組織の内部で民主主義をいかに実践するかということである。生産者団体が成長し何がしかの収入をえられるようになること、内部にボスの人物が形成される。多くの場合リーダーシップがあり献身的に活動をおこなう人物なので、組織作りにおいては大切な存在だ。ただ、日々生きぬくこと自体が大変な貧しい人びとのあいだではとりわけ、ボスになることは自己の利益の確保と直結する。これとフィリピン社会に深く広く浸透している家族中心主義が結び付き、いつの間にかボスの家族を中心に組織が運営されるようになるケースが多いのである。実際、アクセスは過去この問題で手ひどい失敗を経験したことがある。

わたしたちがフェアトレードをおこなう際にめざすのは、ボス一家の家族経営的組織ではなく、「より貧しい人びとにチャンスを提供し、家族関係を越えた地域住民の助け合いが民主的におこなわれる協同組合として生産者団体を育てる」ということだ。民主主義的な人と文化の育成という、難しいがやりがいのある課題に挑戦しようとしているのである。



現在、生産者は7名だが、拡大をめざしている



熱心に生産に取り組む女性たち



現地スタッフと真剣に議論する生産者たち



デザイン開発や販売をおこなうボランティア



2000年当時、フェアトレード事業立ち上げにかかった学生2名と現地住民



ココナッツ殻製の石鹸置き

野田 沙良

特定非営利活動法人アクセス
— 共生社会をめざす地球市民の会 事務局長



ドングリだけでは育たない イベリコ豚

の ばやし あつし
野林 厚志 民博 研究戦略センター

ブランド化するスペイン産の生ハム

この数年間、イベリコ豚が地域ブランド化していく過程をスペインで調べてきた。日本のバブル期に「イタ飯」の前菜の定番だった生ハムだが、最近では、ハモン・セラノやハモン・イベリコといったスペイン産のものもよく見かけるようになった。ドングリで

育つイベリコ豚の生ハムは美味しいだけでなく、良質な脂肪は健康にもよいという評判で、いい値段である。確かに、ハモン・ベジョータ(さしずめドングリハムといったところか)を指でつまみあげると、表面から油脂分が溶け出し、口のなかにいれると香ばしい独特の風味が広がる。脂っこいのに胸やけせず、赤ワインともよく合う。サンドイッチもいける。アンダルシアの人びと自慢の土地の宝物であることを実感する。

ドングリ以外でも育つ？

でも、ドングリは一年中実るものではない。イベリア半島でもドングリが結実するのは秋から冬のあいだである。すなわち、ブタをドングリで育てることができるのは、秋から冬にかけてのみとなる。この時期のブタは一日あたり八〜一〇キログラムのドングリを食べ、体重をおよそ一キログラム増やす。ドングリ



飼料飼育の個体から作られたハモン(右上)とパレット(右下)。値段は1本単位(10kg前後)。左上のドングリ飼育のハモンはkg単位の値段がつけられている。価格の差は歴然としている

の時期のブタの放牧はモンタネラとよばれ、地域ブランド化を戦略的に進めるために作られた原産地証明制度のもとで、モンタネラによって七〇〜八〇キログラム増量し一〇キログラムをこえる個体から作られる生ハムを、ハモン・ベジョータと認定する。ドングリが不作となった

年には人工飼料をあわせて育てることになるが、人工飼料の割合が多かったブタは、イベリコ品種であってもドングリで育てられた個体には認証してもらえない。

わたしの友人は、クリスマス前にパレット(前肢)・ベジョータを一本買った。値段はハモン(後肢)・ベジョータの半額近く。友人曰く、パレットは安いだけでなく、脂肪分もほどほどで食べやすく、子どもにもおやつがわりに食べさせられるとのこと。普段使いできる気楽さもパレットにはあるようだ。パレットかハモンか、ドングリで育てられたかどうかということは、

日本の消費者のあいだではそれほど厳密に意識されないかもしれない。でも、土地の人たちにとってはそれらの差は歴然としている。自分たちが自慢できるものを世界中の人たちに食べてもらいたいという土地の人たちの思いを、日本にいても味わいたいものである。

標本番号 H0230724
地域 インド
受入年 2005年
本館音楽展示場にて展示中

民博 先端人類科学研究部

寺田 吉孝

この楽器を見るたびに、南インドのマドラス（現チェンナイ）に住み込んで音楽を習っていたころのことを思い出す。八〇年代半ばのことだから、もう四半世紀も前のことだ。ある師匠に弟子入りして手ほどきを受けていたのだが、これがとても難しい。ナーガスワラムのようなダブルリード楽器（二枚のリードのあいだに息を吹き込んで音を出す楽器）は、ユーラシアを中心に世界各地で演奏されているが、ナーガスワラムはそのなかでもっとも大きい部類にはいり、全長は九〇センチほどある。そのため指孔の間隔が広く、全部の孔を閉じようとすると、指をいっぱい開かなければならない。普段使わない筋肉を使うので手や腕がつかれることがある。また、ナーガスワラムを演奏するには、抜きん出た体力が必要だといわれる。吹き込む息の量が多いので肺に負担がかかるし、慣れないと余計な

力が入るため体力を消耗する。ダブルリード楽器の経験がなかった私は、少しできるようになると体調を崩して休んだりしていたので、結局あまり上手にならなかった。

それでも、床にあぐらをかいて座り、肘を少し張るように楽器をかまえ、リードをくわえて息を吹き込むと、不思議にその場の中心にいたような感覚に陥ることがある。ナーガスワラムは、初めて聴くと音の大きさにも驚くが、有無を言わず体に浸入してくるような響きをもっている。その音に包まれると、自分の息から生まれた音であることさえ忘れるほどだ。ナーガスワラムがヒンドゥー教の宗教儀礼や結婚式に欠かせないと考えられているのは、その音がこのような一種の陶酔感を誘う力をもつからだと考えている。



住居をよむ

——中国新疆ウイグル族の暮らしの場

くまがい みずえ
熊谷瑞恵
民博 外来研究員

柔軟な空間
ウイグル族は、中国の少数民族のひとつである。イスラームを信仰するトルコ系民族で、居住地を、おもに中国最西端の新疆ウイグル自治区としている。この地は、中国でありながら、周囲をパキスタン、アフガニスタン、カザフスタン、ロシアにかこまれた、漢文化とは異なった文化のはじまる地である。

ウイグル族の住居にみられる特徴のひとつは、その部屋のなかに、ほとんどものがないことだ。絨毯の敷いてある居室、その一隅に、積みあげられた座布団。それだけなのだ。サンドウクトよばれる衣装箱をのぞけば、家具はほとんどみられない。私物もない。このような部屋が、ひとつの住居にひとつというのならまだわかる。しかし、平均で六〜七つある部屋のほとんどがこうなのである。それが夫婦の部屋なのか、子どもの部屋なのかといった使いわけの痕跡も、そこには見出すことはできない。パソコンを置いた机のある部屋をみつけたとき、わたしは、きつとこは「仕事部屋」か「勉強部屋」なのだと思ったりしていたのだが、こは今予ど

分がおこなわれることはなかった。この人同士の妙な「近さ」、これがわたしをこの地に惹きつけてきた理由でもあった。

私的な空間をわけることは、座位のとられかたといった点からもみることができる。それは例えば日本での、住居の奥を背にした主人の座位「横座」と、入口を背にした「客座」である。だがウイグル族の住居では、この座位も異なっていた。ここでは、客は奥を背にして座り、居住者は入口付近に座っていた。これは、大人数をむかえた際には、居住者は入口前にしゃがんでいるというかたちにさえなっていた。これでは住居が客のために建てられた空間であるかの

もが飛び跳ねて遊ばない場所だから」とそこでの麵をのばす作業が始められたりしていた。こは「台所」だったのか？

このような住居の調査として、まずわたしがこころみしたのは、部屋の名前を聞くことだった。これまで人類学の住居研究では、住居には、客間、居間、そして寝室といった、公的から私的にいたる空間の区分がみられることが指摘されてきた。この区分という点からみた場合、ウイグル族の住居はどのような空間であるといえるのか。聞きとりをした結果、わかったのは、ウイグル族の住居の部屋には、名前が「ない」か「すべて客間だ」ということだった。

公私をわけない

こうした部屋での暮らしかたをみていくと、人びとが個人的な時間をすごしたり、目的ごとに部屋を使いわけるといことがほとんどみられないことがわかった。人びとは、いつもひとつの部屋に全員が集まるといのかたちでその空間をすごしていた。ここでは勉強も、雑談も、料理も、昼寝も、もてなしも、同じひとつの部屋である。住居が、私的な空間の確保を目的としていないのだとすれば、それはどのような空間でありうるのだろうか。

「女性」のつきあいの場

この住居のもつ秩序のありかを示してくれたのは、ここを出入りする人びとのありかだった。ウイグル族の住居には日々予告なく客がとずれていた。こうした、なかば歓迎を強制する客には、複数の家々のあいだで、共通している点のひとつあった。それが、客のほとんどが女性だという点である。冠婚葬祭のあいさつから、遊びにきたという客にいたるまで、住居に



絨毯を広げると居室が誕生する。これからここでどのようなつきあいが生まれていくのか

屋でなされていたのである。そうした部屋は、その季節でいちばんすこしやさしい気温の部屋であることが多く、その位置は、砂嵐やストーブの火の有無等によってもすぐに変更されていた。誰も、誰かの侵入をこぼむ私的な空間をもたず、人びと自身も誰かとともにいることをさげようとはしていなかった。就寝時に男女をわけるといことはみられたが、それ以外で目立った区

は日々女性の客がおとずれていた。このような女性の客には、男性はあまり接すべきではないとされていた。そのため、こうした女性の客はすべて妻にとつての客であったといえる。興味深かったのは、夫方の男性の友人といった関係であっても、あいさつとなるとやってくるのは女性であったことである。ウイグル族のあいだでは、手土産をたずさえたあいさつ行為は女性だけがこなえるものとされていた。そのため、夫同士のつきあいも、あいさつにおいては妻同士の関係によってなっていたのである。

こうして、妻はつきあいに欠かせぬ人物として住居におり、外へと出かけるのはもっぱら男性だった。男性はまた、礼拝が、男性のみ大人数でおこなうことが推奨されているということも理由の皮きりに、終日外出をくりかえす。住居では、妻は女性客をもてなす主人であり、夫はそのもてなしのための買い物にでる。こうした場合、住居とは、私的な空間ではなく、「女性」「男性」とで分けられた「女性」のつきあいの場と考えられたのである。

新疆にいたころ、わたしは、ひとりですごしているときに目の前にたくさん女性たちが入りこんでくることへ「いらだち」をおぼえたりしていた。そして「こんなことを感じているようでは、彼らのつきあいはこなせない」と嘆息したりしていた。それは、わたしの彼らに対する興味、わたしとは何かという問いでもあったことに気づくときであった。



迎えられる女性客。友人のメッカからの帰国を祝う宴席にて



壁沿いに、きしめんのような長い座布団を敷き、食卓となる布を広げた、女性たちをもてなす宴席の場（友人のメッカからの帰国を祝う宴席）

7月

みんなくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■時間 14時30分から15時30分

■展示観覧料が必要です。

※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんなく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。

どんでん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

8日
(日曜日)

話者：田村克己（国立民族学博物館 教授）

話題：ビルマ／ミャンマーの口コミカ

会場：本館展示場（東南アジア休憩所）

15日
(日曜日)

話者：福岡正太（国立民族学博物館 准教授）

話題：みんなくの展示と映像

会場：本館展示場（ナビひろば）

22日
(日曜日)

話者：山本泰則（国立民族学博物館 准教授）

話題：あたらしくなったビデオテーク
——みんなく最後のビデオテーク ???

会場：本館展示場（ナビひろば）

29日
(日曜日)

話者：三島禎子（国立民族学博物館 准教授）

話題：移民の国フランスとアフリカの深い関係

会場：本館展示場（ナビひろば）

1年間みんなくに何度でも入館できる 「みんなくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんなくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引

◆みんなくミュージアム・ショップとレストランの10%割引

◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。

詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。

(電話06-6877-8893 / 平日9:00 ~ 17:00)

編集後記

本号特集の主演、広瀬さんの、ざわつて感じ、知り、表現する、という世界の存在についての啓発は、民博の研究や展示にあらたな可能性、そしてあらたな気配りの方法を示してきた。障害者、弱者に配慮したユニバーサルデザインや情報提供の多様化が叫ばれる今日、たしかに民博の展示や来館者サービスにみられる対応は、時流の反映ともいえよう。しかし全盲の人のびとが、視覚にとらわれず、ある意味でモノヤコトの本質を感じとれる目をもつことを、研究をとおして実証してきたのは広瀬さんだ。

なによりも健常者を見常者といいかえ、「触文化」など新語を次々とつくってきた彼のユーモアと発想力は、見常者がはれ物に触るような慎重さをもってしか接しえなかった、目が見えない世界がちっとも暗くないことを教えてくれた。

7月からは連続講座「博物館にさわる」が始まる。多くの人にとって触文化への開眼の契機となればと思う。

(庄司博史)

2012年6月号6ページ、「産業化とともに——19世紀末～20世紀初頭のヨーロッパ」において、編集作業の過程で下記のとおり誤りが生じました。謹んでお詫び申し上げます。

- 第二段落見出し（誤）「工業制機械工業が引き起こしたもの」
（正）「工場制機械工業が引き起こしたもの」

- 表紙：石彫像（ホッキョクグマ）H0227853 制作者：ナレニク・テメウ
民族：イヌイット 制作地：カナダ 1960～80年代制作

次号の予告

特集

特別展 世界の織機と織物

織って! みて! 織りのカラクリ大発見(仮)

月刊みんなく 2012年7月号

第36巻第7号通巻第418号 2012年7月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1

電話 06-6876-2151

発行人 八杉佳穂

編集委員 庄司博史（編集長） 小川さやか 樫永真佐夫

久保正敏 菅瀬晶子 山中由里子

編集アドバイザー 山内直樹

デザイン 宮谷一敦

制作・協力 財団法人 千里文化財団

印刷 日本写真印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

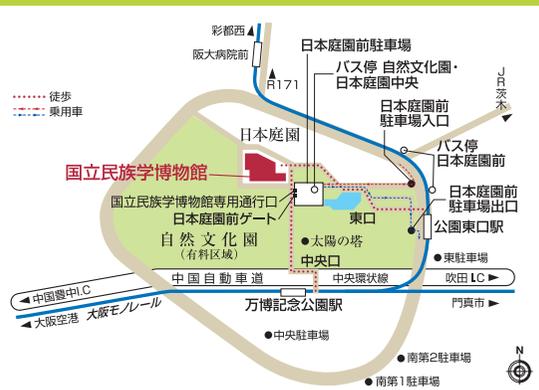
交通案内

●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分

●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。）

●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。

●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてください。



みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

